



◎日本社会学の祖・文学博士の遠藤隆吉により巣園学舎として創始された。「努力主義と英才早教育」を教育方針の二大支柱としている。「螺旋状階段方式」による、全教科を総合的に体系化した6年間一貫のカリキュラムを組む。

設立	1910(明治43)年
形態	全日制／普通科／男子校
生徒数	1学年約240人(高校)
12年度入試合格実績(現浪計)	国公立大には、筑波大、千葉大、東京大、東京工業大、一橋大、京都市などに104人が合格。私立大には、青山学院大、慶應義塾大、上智大、中央大、東京理科大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ602人が合格
住所	〒170-0012 東京都豊島区上池袋1-21-1
電話	03-3918-5311
Web Site	http://www.sugamo.ed.jp/

東京都・私立
巣鴨中学・高校

伝統校の指導改革

6年間の指導改善で 生徒からの信頼感を高め 「学校力」を向上

変革のステップ

背景

◎生徒の気質が変化し、自ら学ばなくなった。生徒の自主性に任せた進路指導も機能せず、大学合格実績が低迷

実践

◎6年間の指導を見直し、学習習慣の定着化からスタート。高校では早期から受験を意識させる指導に切り替える

成果

◎東京大を始め国公立大や難関大への合格者が増加。学校に対する生徒や保護者からの信頼感も高まる

生徒の気質の変化に伴い
積極的な進路指導が必要に

巣鴨中学・高校は、2012年度入試で東京大合格者数が40人を超えるなど、名門校として復活を遂げた。ばらばらになりがちだった生徒の思いを1つにまとめ、学年全体で大学受験に向かわせた中高6年間の指導の成果だった。

近年、同校は大学合格実績などの面で低迷していた。その主な原因は、生徒の気質の変化に適切に対応できていなかったことにあった。かつて、教師は自ら学ぼうとする生徒の背中を押すだけでよかったが、最近は中学校に入学しただけで満足してしまい、教師がお膳立てをしなれば学習に向かわない生徒が増えていた。例えば、予習を宿題と義務付けたのは、教師が言わなければ予習をしなくなっていたからだ。3学年主任の新井君男先生は次のように指摘する。

「自ら学習する生徒も一定数はいますが、学力の二極化が問題となりました。以前と比べて中学校入試の難易度が下がったこともあり、学習量が不十分な生徒も増えました。そうした生徒は、学習習慣が定着していません。高みを目指すのではなく、目の前の小さなハードルを越えることだけを考えているのです。そのため、テスト対策として『間に合わせ』の学習をするだけで、本当の力が付いていないという課題がありました」

一方、他校を不合格となり不本意な思いで入学してくる生徒もいる。そうした生徒の保護者は、同校の教育に不安を抱いて早々に塾に通わせ、学校での学習をおろそかにすることを容認する傾向が見られた。しかし、学校と塾の学習の両立は難しく、結果、大学受験がうまくいかないケースも少なくなかったという。

「保護者が本校を信頼していないことで、学習がうまく進まないケースが目立つようになっていました」（新井先生）
進路指導にも課題があった。指導は学年ごと



巢鴨中学・高校
新井君男 あらい・きみお
教師歴、同校赴任歴共に36年。3学年主任。「正直であること、謙虚であること、筋を通すこと。生徒のために汗をかく」



巢鴨中学・高校
井上貢文 いのうえ・たかふみ
教師歴、同校赴任歴共に21年。3学年担任。「つらい時こそ自分と勝負できる、自分を信じ切ることが出来る人間を育てたい」



巢鴨中学・高校
小原広行 おはら・ひろゆき
教師歴、同校赴任歴共に20年。進路指導係。「学び続けること、柔軟な発想を持つこと、創造すること、良い意地を張ること、諦めないこと」



巢鴨中学・高校
森山敦史 もりやま・あつし
教師歴、同校赴任歴共に9年。進路指導係。「生徒にとって何が必要かを考え、柔軟、かつ迅速に決断力を持って行動すること」

に行われ、引き継ぎがなかったためにノウハウやデータはほとんど蓄積されていなかった。進路指導係の業務は、大学合格実績をまとめる程度にとどまっていた。生徒が目標を持って計画的に学習していた頃はそれでも問題は生じなかったが、生徒の気質の変化と共に積極的な進路指導が求められるようになり、改革を迫られていた。

週末の「鏡考帳」で 学習習慣を身に付けさせる

こうした状況に教師は強い課題意識を抱き、学校外の研究会などに参加して改善策を検討していった。そこに学園の運営体制の変更も重なり、06年度の中学入学生から改革に着手した。まず、中学校の入学段階から家庭学習習慣を付けることが何より重要と考え、「鏡考帳」を始めた。これは毎週末の課題で、主要新聞5紙のコラムから学年団の教師が選んだ1つを、原稿用紙型のノートにきれいな字で正確に書き写すという内容だ。1年生はマス目に書き写すのみ、2年生はコラムに出てきた難しい語句や漢字も調べて書き込み、3年生になるとコラムの要点や自分の意見も書く。進路指導係の小原広行先生は次のように話す。

「平日は宿題がありますが、土日は気が緩み遊んでしまう生徒が少なくありませんでした。慣れないうちは書き写すだけでも1時間

半は掛かる分量としたので、きちんと机に向かう習慣が付きます。新聞を題材としたのは、世の出来事を自らの鏡として考え、生徒が自分の行動を見つめ直したり、コラムの内容が家庭でのコミュニケーションのきっかけになったりすることを期待したからです」
誤字やマス目からはみ出した文字は何度でも書き直させるなど、指導は徹底した。

「文字はコミュニケーションの道具の一つであり、答案や履歴書など、文字から人物を推測される場合もあります。『字を丁寧に書くことは、相手に自分を伝えることになる』と生徒に何度も教えていくと、次第にきちんと書くようになっていきました」（小原先生）
また、生徒の傾向として国語が苦手な面があり、「鏡考帳」には国語力を高める狙いもあった。中学1年生から3年間続けたことで、高校生になってからも文章を書くことを好み、記述式問題もしっかり書く生徒が増えたという。更に、起床・就寝時刻、家庭学習時間、遊びの時間などを毎日記録する「日課帳」も導入。日々の学習時間を集計させて、生徒の自覚を促した。
中学校では、国語、数学、英語の3教科で、毎週、朝や放課後に小テストも行った。授業の学習内容がテスト範囲となり、不合格の場合は再テストを実施。それでも合格できない生徒に対しては、補習を行った。小テストと補習を毎週行うことで学習を継続させ、基礎学力の定着

*プロフィールは2012年3月時点のものです

験会場に向かう飛行機に乗る前に『この部屋から出発したい』と立ち寄り、仲間と互いの健闘を祈り合う姿を見た時は胸が熱くなりました」

進路指導室は、下級生にも良い影響をもたらした。

「高校3年生だけ下校時間を1時間遅らせて19時までにしたことで、進路指導室と特別自習室だけ明かりがとるようにしました。それに気付いた部活動帰りの下級生に『3年生が残って勉強をしているんだよ』と話すと、感じ入っている様子でした。先輩の姿が後輩に影響をもたらし、学校で学習する姿が良き伝統になればと期待しています」（新井先生）

高校3年生の7月に行う2者面談も、進路指導の重要なポイントとなる。1学期に模試でDやEの判定が出ると弱気になる生徒が多いが、担任は夏休みの学習で盛り返せることを伝え、生徒と一緒に400時間の学習計画を立てる。

「どのような生徒でも学力が伸びる方法には必ずあります。それを見付けて、生徒と一緒に計画を立てていきます。その際に重視するのは、夏休みに取り組む問題集を生徒自身に計画表に書かせることです。効率的に学習するには適切な問題集を選ぶことが重要ですが、自分に合った問題集を見付けるのはなかなか難しく、背伸びをしていたり、『友だち

がやっているから』という理由で選んでいたりすることがあります。そこで、生徒がどのような問題集や参考書を使っているのかを書かせて、教師が知らないものであれば学校に持ってこさせて中身を確認してから取り組ませるようにしました」（井上先生）

夏期講習の充実も大きな改善だ。それまで教師個々に行っていた講座を体系立て、5教科で合計45講座を設けたところ、9割近くの生徒がいずれかの講座に申し込んだという。

生徒と保護者からの信頼感が「学校力」を高めていく

従来は生徒任せにする傾向が強かった志望校の選択に、教師が寄り添って意見を述べるようになったことも変化の1つだ。

同校では、「志望校に迷ったら東京大を目指す」と生徒に伝えた。その理由を新井先生は次のように説明する。

「東京大は単に難易度が高いから目指すのではなく、何かを求めて行く大学です。自分が大学で何をしたいのかを迷っているのであれば、さまざまな教育体制や環境の整っている東京大を目指すことは、1つの考え方だと思います。また、『東京大』は生徒の意識を引き上げるシンボリックな意味もありました」冒頭で述べた通り、12年度入試では東京大合

格者が増えた他、東京大には合格できなかったものの、「東京大を目指していなければ、早稲田大や慶應義塾大にも合格していなかった」と述べた生徒も複数いたという。

さまざまな取り組みにより、生徒の学校に対する信頼感が高まったことも大きい。教師に添削を依頼したり、質問に訪れたりする生徒が増えたことは、教師の指導のモチベーションの1つとなっているという。

「以前に比べて、生徒は受験直前の時期でも登校するようになりました。国公立大の個別学力試験の前日、自習室で机に向かう生徒たちに『そろそろ帰った方がいいんじゃないか』と声を掛けても、夕方まで残って自習していた生徒もいました。生徒同士、また生徒と学校が一体になって戦っているという実感を持ってました」（森山先生）

中高6年間の指導を見直し、学校全体で受験に取り組むことで学校力が高まってきたと、小原先生は感じている。

「生徒や保護者に学校を信頼してもらえば、学校は生徒の未来に対して背中を押してあげることが出来ます。そこに実績が積み重なることで、学校力が高まっていくと考えています。それは、我々教師にとっても大きな励みとなります。新しくなった指導体制を今後も続けることで、真の学校力として定着させていきたいと思えます」